戦旗

第一号
共産主義者同盟機関紙
一九六〇年一月一日発行
東京都文京区元町一の七
世界労仂運動研究所内
一部　十円

万国の労仂者団結せよ!
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ!

「戦旗」固定購読
お申し込みは
東京都文京区元町一丁目七
世界労仂運動研究所内
共産主義者同盟書記局
定価　一部　十円
月　三〇円　半年　一八〇円

世界革命の新たな展望をきりひらけ

日本労働者階級の革命化のため さらにばく進せよ

一九六〇年の年頭にあたってすべての共産主義者に訴える

共産主義者同盟中央委員会

「一九五九年は、世界史の決定的転換を進めた年だった。冷戦政策に終止符がうたれ、平和共存の偉大な時代がはじまったのだ…」右から左まですべてのジャーナリズムはこうくりかえしている。もはや闘争の時代は終り、話し合いによる平和の時代がきたのだと。

それにしては、日本での十一月二十七日の状態は、なんと古典的な群集の行動だったろう。日本の人民大衆は時代おくれなのか?

世界が「平和的」になっていることは誰の目にも明かである。昨年、フランス共産党の裏切的な指導によって、フランスプロレタリアートがドゴールの前に無惨に敗退してから、世界は一層安定したように見える。

ドゴールの勝利はフランス資本主義の立直りをもたらし西ドイツとの連携による米ソに加わるグループの登場として両体制に均衡的影響をあたえているのだ。

だからこそ、資本主義の打倒を求めず、ただただ、現状の維持をのみ追求するフルシチョフやトレーズのような手合いには、一九五九年はよろこばしい年だったのだ。フルシチョフ、アイクとドゴールと、どちらをえらぶべきかに今全神経を集中している。ドゴールが新たな盟主として、NATO内部に独自の動きを開始していることは、彼にとっては、利用すべき方向に見える。西欧諸国の内部の対立は、きたるべき東西首脳会談での彼の位置をきわめて有利にするからだ。トレーズが、ドゴールのアルジェリア政策を支持したことは、このような公認の国際共産主義運動指導部の方針とは無縁ではなかったろう。しかし、このような方針はブルジョワ政治家の方針ではあってもプロレタリアートの方針ではない。

ドゴールの登場、それは、帝国主義の競争に、新たな一段階を画し、その一層の激突をひきおこすものなのだ。たしかに、それが公然たる武装闘争にまで進まないので世界は安定した平和の観を呈する。資本家自身が、戦争よりも、平和的手段のほうが安価で確実だと考えているからだ。

しかし、資本主義の利潤追求を動機とした活動は、鉄のような必然性をもって、その相互競争に打ちかつための闘争をきびしいものにしていくのだ。

フランス資本主義が西ドイツとの連携によって自己の力量を強める時、それは失地回復をめざすイギリスとそして安価な労仂力を求めて対外投資を拡大させつつあるアメリカとの競争をさらに強力に進めねばならなくなる。

プロレタリアートの敗北を一つの要因として生みだされた現在の均衡的安定の状況、それはよりはげしい帝国主義の間の闘争を準備する過程なのだ。

資本家達の高度に計画された設備の拡張計画は、全体の資本主義世界をより無計画な競争にひきこんでゆく。各帝国主義列強は何よりも低コストをねらった労仂者階級への合理化攻勢と政治的安定と威信をめざした一連の外交的手段をさらに追求することとなる。

「もたらされた平和」、その奥底では、さらにはげしく決定的な相互衝突と階級闘争の激化が準備されているのだ。

問題は、このような一時的安定を恒久化するために、帝国主義者の間をかけまわって、合縦連衡にうきみをやつすことではない。

それは、第二次大戦直前の独ソ不可侵条約をはじめとした、あの悲劇的ジグザグを今度はむしろ喜劇的に準備することとなろう。

帝国主義が存在するかぎり真の安定した平和などありえない。あるのは一時的な弱い平和だけである。真の平和をもたらすもの、それはただ帝国主義を打倒した世界社会主義革命によってのみえられるのだ。

しかし、帝国主義列強の到達した経済的繁栄の状況は超過利潤をもととした労働貴族の大量の成長を可能とした。「平和的気分」「緩和された」対立意識は、何よりもこのような労働貴族によって大量にプロレタリアートの中に持ちこまれてゆく。国有化からマルクス主義にいたるすべての労働者的要素を全く追放したドイツ社民党ゴーデスベルグ綱領は、この端的なあらわれである。

革命的動乱を死よりもおそれ小ブル的気分に全くひたされてきた全世界のスターリン主義者の「平和」「平和」の大合唱は、このような状況の中で一層小ブル的な反労働者的な役割を演ずることとなる。労働者階級が、平和に酔いしれている間に資本家の資本蓄積は着々と進んでゆくのだ。そして、それは一時的な安定などをふきとばす激動の時代にいたる矛盾を蓄積しているのだ。

小ブル的な「平和主義」がまんえんしている時、革命的プロレタリアートは、まずきっぱりとこのような小ブル的安定思想と決定的に闘かわねばならぬ。資本家階級とのかけひきやとりひきの泥沼にはまりこむのではなく、彼等に対する非妥協の闘争を組織し、彼等の支配を打倒することによって自らの解放をかちとる立場を確立せねばならぬ。帝国主義者間を調整し平和のイニシアをとることによって、落日の立場をもちなおそうとしておこなわれた、アイクの西欧諸国歴訪を歓迎した、イタリア共産党のごとき状態を、革命的プロレタリアートは黙視してはならないのだ。ブルジョワ社会の好況と安定が、おそるべき思想的混乱をプロレタリアートの戦列にもちこんでいる状況を正視せず「状況がわれわれに有利になった」などと称して手ばなしで党員の倍加運動を開始した日本共産党は基本的に小ブル政党に転化することによって報いられるであろう。

一九五九年のブルジョワ世界の中で、欧州共同市場とならんで日本資本主義の蓄積は急速に進んだ。すでに第五位に達した鉄鋼生産を一九七〇年までに米ソにつぐ地位に達すべく、一層の設備投資が行われている。東南アジアにかぎらず、全世界にわたって、日本商品の進出はつづいている。日本の資本家階級は、列強諸国にたいして、野望にもえて闘争をいどみはじめているのだ。

そのために、彼らは労働者階級をうちやぶって、合理化を推進し、政治的に安定した状態をつくりだそうと各方面で活動している。労働者階級の中心部隊炭労への潰滅的攻勢の開始からさらに国鉄、電通、鉄鋼へと進行する一連の大合理化計画と、安保改定、小選挙区制等の政治的攻勢である。これにたいして、日本プロレタリアートは、指導部の混乱と動揺の中でも、その階級的力量を保持し、世界最強の戦闘力を持つにいたっている。

きたるべき一九六〇年代の全世界史は、日本においてプロレタリアートにいどまれるブルジョワ階級からの合理化と政治的安定のための攻勢に、プロレタリアートがどう闘うか、を一つの重大な焦点とするだろう。プロレタリアートが完敗しブルジョワからの攻勢が勝利に終る時、帝国主義列強の闘争は、さらに新たな段階に入る。それは帝国主義の競争戦を極度にしれつなものとし、さらにその重壓を全世界におよぼすこととなるだろう。日本プロレタリアートが、ブルジョワの攻勢をまず部分的に次いで全面的にはねかえす時、それはアルジエリア戦争がフランス帝国主義におよぼした以上に、深刻な危機と動揺をもたらすであろう。全世界の階級闘争の帰すうは、すでに開始され、さらに全面的に強化される日本ブルジョワジーの日本プロレタリアートにたいする攻勢にかかっている。ブルジョワ反革命の将校として、日本帝国主義が確立されるか、プロレタリア革命の突破口をわれわれがきりひらくか。プロレタリアートと革命的指導部の活動がそれを決定するのである。

一九五七年に成立した岸自民党政府は、戦後の日本資本主義の再建の活動の一定の成果の上に、鳩山、石橋という経過的政府の後に成立したブルジョワ体制の確立を目指した政治委員会であった。この政府のもとに、一九五七年の国鉄からはじまって日教組、炭労へと、かれらのプロレタリアートへの攻撃は進められてきたのである。日本資本主義の蓄積にともなう超過利潤の増加は労働貴族による労働運動指導部の右傾化を促進している。新潟闘争から低姿勢論は市民権を確立し、中核炭労と精鋭三池を、まるはだかで敵にうりわたすところまで民同指導部は後退してきている。一方、完全な資本家の手先全労・西尾派は、一定の力量と影響をもちはじめてきつつある。彼らは、西尾派による分裂の脅威によって、総評全体の右傾化をはかり、あわよくば、全労による労働運動の全面的再編成をなしとげようとしているのである。しかし、彼らのねらいが低コストによる海外市場進出力の強化である以上、彼らがプロレタリアート全体を労働貴族化することは不可能である。若干の賃上げとひきかえに長期の安定搾取体制のおしつけが進む時、下層労働者の間での、不満と戦闘力の蓄積は当然増大する。五九年十一月二七日の国会デモは、このような労働者階級の戦闘力が、爆発的な威力を持つことの、小規模な証明であり、日本における階級闘争の深刻化の一つのバロメーターであった。いかに妥協主義者が調停につとめ、対立を緩和しようとしても、冷厳な市場競争に勝ちぬくための合理化が至上の要請である以上、プロレタリアートとブルジョアジーの激突は避けられない。日本プロレタリアートにとって重大な階級的戦闘の瞬間が開始され、進行しつつあることは明かである。このような中で何よりも必要なものは、小ブル的意識におかされることなく、暖かな平和的な気分に安住することなく、徹底的に闘いぬく、真の戦闘司令部をプロレタリアートが確立することである。国会デモなどでたじろいだり、敵階級に屈服したりするものにはもはや来るべき一九六〇年の戦闘を指導する資格はない。いかなる困難にもおそれずに闘いぬく、革命の指導部を作りだすために今やすべての精力が投入されねばならない。階級闘争の指導部隊たることを目指して結成されたわが同盟の、昨年の闘争における決定的成長は、ブルジョワ世界への一の脅威でさえあった。国会デモ直後の、あのあらゆる権力を動員した、わが同盟への攻撃は、このことを端的に示している。もちろん、われわれはこのようなブルジョワの攻撃をおそれない。それはただ、かれらの階級支配の危機の深刻化を示すものにすぎないからだ。われわれは一年の経験の中で、すでに、一定の力量を日本プロレタリアートの陣列にきずくことに成功した。われわれはすでに昨年初頭の数倍の強力な職業革命家の集団として自らを武装している。その上にわれわれは全国機関紙をかちとったのだ。われわれはこの成果の上に来るべき年月を全速力で突進するであろう。われわれが前進する時、小ブルジョアは悲鳴をあげて「もっとおだやかにしてくれ」などと泣き言を言うかも知れぬ。だがそんなことはわれわれは覚悟の上である。この一九六〇年に、プロレタリアート内部で展開されるであろう激烈な党派闘争に勝ちぬくためには、いささかの日和見もあってはならないのである。社会民主主義的思想に対する妥協のないボリシェヴィキ的な党派闘争をおそれず闘いぬくものこそ日本プロレタリアートの指導者となりうるのだ。

敵階級との闘争をおそれぬ革命的労仂者諸君!わが同盟とともに、階級闘争に立ちむかおう。一九六〇年の闘争の中で、完全に日本プロレタリアートの指導部隊となり、階級闘争の主人公となるために全力を上げようではないか!

戦旗創刊にあたって

戦旗編集部

全日本の革命的労仂者諸君!

われわれは、われわれの機関紙〝戦旗〟を、ほこりをもって諸君らの手に送る。

われわれは、わが機関紙の名称を〝戦旗〟とすることにした。

〝戦旗〟、それは、かつて戦前の全日本無産者芸術家連盟(ナップ)の機関紙として、天皇制権力のはげしい追求の中で、プロレタリアートの文化を創造するため闘った革命的芸術家たちの機関誌名でもあった。多喜二の「一九二八・三・一五」を始めとした多くの革命的作品がブルジョア権力に対する火のようなにくしみの文字として、この雑誌をかざったのだ。

われわれは彼らの革命的熱情とプロレタリア英雄主義を無条件にうけつぎ、守りぬくだろう。そして、彼らの大部分が、スターリン主義の誤ったドグマと当時の清淘・日本共産党の誤れる指導の中にみずからをしばりつけたがために、みずからの革命的情熱をすりへらし、現在みるも無惨な小ブル的芸術家に転落した過程を、断じてくりかえさぬため、真の階級的前衛党建設の武器として、わが〝戦旗〟をきたえぬくだろう。

昨年一年の、敵階級とのきびしい階級闘争の中で、日和見主義者とのはげしい党派闘争の中で、われわれは、全国的政治新聞をもたぬことをどんなにはがみして口惜しがったことだろうか。敵階級が、あらゆる商業的宣伝手段を動員して、小ブルジョア的イデオロギーを大量に労仂者階級に浴せかけ、自称前衛党の機関紙〝アカハタ〟が、それに劣らぬ小ブル的意識をもちこんできている時、労仂者階級の真の階級的政治新聞の発刊こそ、真の前衛がはたすべき任務だったのだ。

すでに五十年前に、偉大なレーニンが教えたとおり、職業革命家による強固な中核の活動と、全組織を統一する全国的政治新聞の発刊こそ、真の階級的前衛党建設の、中心的任務である。

だからこそ、われわれ共産主義者同盟は、昨年八月の第三回大会で、全国的政治新聞の発行を決定し、そのための労仂者印刷所の建設に、全組織が力を傾注することにしたのだ。

われわれは全同盟の努力によって、ここに全国的機関紙を発刊する体制を完全に確立した。

われわれは、今後いかなるしれつな闘争の中でも、断乎として機関紙発行の体制を守りぬくであろう。

新聞は当面旬刊発行であろう。しかし、われわれはさらに全力を傾注して、週刊から週二回刊へ、そして日刊へ、前進を続けるであろう。さしあたり本年四月からの週刊をめざして全力をあげて、とりくむだろう。

あらゆる権力を動員した抑圧と、日和見主義者の妨害の圧力の中で、この目標をかちとることはいうまでもなく安易な事業ではない。

しかし、すでに、あらゆる既成の日和見主義から解放されたわれわれにとって、おそれるものはなにもない。強力な中央編集体制と、全国的通信網と、無数の分局に支えられた鉄の配布集金体制こそ日刊紙の発刊を保証するものである。

労仂者印刷所は、この日刊紙発行計画の中で、いかなる弾圧にも屈せぬ不敗の印刷所として、その機能を充実するだろう。

全日本の革命的労仂者諸君!

われわれは、真の階級的前衛党建設のため、〝戦旗〟の強化のため、諸君の同志的な援助を心から訴える。

われわれは、〝戦旗〟をすべての階層に読まれ、すべての大衆に愛されるようにしようなどと虫のいいことは考えない。

われわれは、いかなるブルジョア法律もおそれずに、資本家階級にたいするにくしみと攻撃の砲火を浴せかけるだろう。

したがって、われわれの新聞は敵階級にただにくしみをもたらすにちがいない。そんなことは、われわれが彼らの打倒をめざしている以上あたりまえのことだ。

もちろんのこと、ブルジョア合法性のわくにしばられた奴れいの言葉をわれわれは絶対に使わない。

資本家の権力を打倒する労仂者階級の真の革命的闘争を組織するため、われわれは、労働者階級にとっての真実を語ることを無二の目的としているのだ。

敵階級が、〝戦旗〟に火のような憎悪をもってのぞんでくる時、われわれは一層の勇気にもえるだけだ。

われわれの語調は、小心な小市民的紳士諸君には口汚く聞え、あるいは彼らを仰天させるかもしれぬ。

しかし、われわれには十人の小ブル的読者よりも一人の労仂者のほうが貴重なのだ。

あらゆる俗物、あらゆる小ブル的評論家のお説教のかわりに、われわれは、資本家に対する火のような憎悪と、闘争の精神を、労仂者階級の中にもちこむであろう。

労仂者階級にとっての真実は、ブルジョア階級にとっての背理であり、そして現在の社会の支配的常識は、ただ資本家階級のイデオロギーを代表するにすぎないからである。

資本主義の若干の安定的傾向のために平和的気分があふれているなかで、プロレタリアートが、みずからの言葉で語ることは、勇気のいることである。

しかし、われわれは、マルクスが、そして、レーニンがおそれず語ったとおり、次の言葉をわれわれの〝戦旗〟の最上の編集の指針とするだろう。

『共産主義者は自分の見解をかくすのを恥とする。共産主義者は、彼らの目的がすべてのこれまでの社会組織の暴力的な転覆によってのみ達成されることを、公然と宣言する。支配階級は共産主義革命の前に戦りつせよ!この革命においてプロレタリアのうしなうものは鉄鎖以外にない。うるものは全世界である。万国のプロレタリア団結せよ!』と。

全世界の自称共産党が、すべて、このマルクスの偉大な言葉、プロレタリア世界革命の目標を、みずから公然とふみにじっている時、われわれは、公然と世界共産主義革命の目標を対置する。

革命的労仂者諸君!

プロレタリア革命勝利のため、今こそわが共産主義者同盟に結集せよ!

〝戦旗〟の強化と充実のため、一大カンパニアを展開せよ!

「戦旗」編集部

「緊張緩和」をわれわれはどう見るべきか

西欧一七ケ国共産党宣言とフランス共産党の自己批判

鏑木　潔

労働者階級はアイクを歓迎すべきか?

東西首脳会談はようやく実現される段取りになった。十九日から行われたアイク、ドゴール、マクミラン、アデナウアーの西方首脳会談は、四月下旬、パリという日どりを設定してフルシチヨフに申入れた。待ちに待った首脳会談はいよいよ開かれるのだ。緊張緩和は決定的となるだろう。「いまや諸国民は、戦争を永遠に追放することこそ達成可能な目標として提起でき」『いまなお搾取と抑壓のもとで呻吟している諸国民の解放が近く実現するときがきたのである。」(欧州十二カ国共産党のアピール)ところで、トレーズによれば緊張緩和の推進者は何よりもソ連でありフルシチヨフであった。そしてこれを支持して東西首脳会談を要求した諸国民の行動であった。その結果がキャンプ・デービットの会談となり、今東西首脳会談に結実しようとしているに違いない。だが、今東西首脳会談を希望しその実現のために奔走しているのはフルシチヨフばかりではない。アイゼンハウアーも最も熱心にこのために活動している。今度の十一カ国歴訪にしても東西会談の実現とそのための地ならしが目的だ。マクミランはわざわざモスクワまでフルシチヨフに会いに行った。ドゴールはフルシチヨフを招待し三月に会う準備に余念がない。「いまや新らしい情勢があらわれた。」(トレーズ)

だとすれば、これはどういうことなのだろうか。われわれ労働者階級は、こうした各帝国主義列強の頭目達の行動をどう評価し、敵階級、帝国主義者に対する闘争を組まなければならないのだろうか。

一つの方向は、例えばトレーズによってあたえられている。「こうした変化は、ひとりでに生じたものではない。」「大衆の活動、『平和運動』こそが、この重要な成果をうみだしたことをあきらかにしなければならない」、つまり『われわれの力の前にドゴールはやむなく彼の伝統的政策を変えたのだ』。この同じ論法でゆけば、日本の場合には『われわれの力が弱いから岸はまだ、政策を変えようとしない』あるいは『岸は世界の大勢にさからって緊張激化の政策をとろうとしている』ということになる。

これは事実に合っていない。一体労働者階級はどうたたかえというのか?ドゴールと闘うのか?アイクと闘うのか?

否、否。

政策を転換した以上、今までのように正面から闘うのは正しくない、この方向を一層おし進めるよう要求しこれに反対して「冷戦にしがみついている連中を孤立させることである」

この政策は欧州各国の共産党によってすでに実行にうつされている。

十二月四日、ローマに到着したアイクは沿道に並ぶ数千の学童に拍手で迎えられただけでなく共産党の歓迎ポスターにも迎えられた。トレーズはドゴールがフルシチヨフを招待したことについて困惑すべきではなくて正しく評価べきだ、といい、アイクの歓迎レセプションに、パリの地方議会の党の議員が政治局決定に逆つて出席を拒んだことは誤りだ、と非難した。

共産党は労働者階級に対して緊張緩和と、東西会談実現のため、アイク、ドゴール等々を支持せよと訴えているのである。

帝国主義者はよくなったか?

たしかに世界の大勢は「緊張緩和」に向っているように見える。アイクもドゴールもアデナウアーもマクミランも首脳会談実現をのぞんでいる。そしてその背後にはたしかに世界的にある平和を待望するムードがあることは事実だが、彼らが帝国主義者であり、資本家階級の世界支配の指導者であるかぎり、彼らの一切の政策は、階級支配の維持・強化という意図からうちだされることは自明のことだ。われわれは彼らのとる「新らたな」政策、アイク・フルシチヨフ会談、あるいは東西首脳会談によってなにをたくらんでいるかを明らかにし、われわれの闘いの方向を確立しなければならない。

ここ二カ月の間に一連の重要な国際会議が続いた。その一つは、十一月二十日ストックホルムでおこなわれた欧州自由貿易連合設立仮議定書調印の会議と同じ日の二十三日からストラスブールで開かれた欧州共同市場諸国外相会議である。今一つは、ロイドのフランス訪問、アデナウアーのイギリス訪問に始り、アイクの十一カ国歴訪で終る欧州諸国の相互交渉を前座として十二月十五日から開かれたNATO理事会と十九日からの西方首脳会談である。NATO理事会では対ソ防衛のため欧州軍を十カ年計画で統合するという問題をめぐつて米英と仏独は鋭く対立した。欧州の主導権回復を狙うドゴールは欧州軍統合に強く反対したのである。対立は未解決のまま十九日からの西方首脳会談にもちこされ、なんらかの形で妥協点を見出したかにみえるが、その背後には東西首脳会談に対する思惑に至る数々の思惑が渦巻いているのである。それは欧州に二つの経済連合が成立し、共同市場と自由貿易連合の間の対立抗争が第二の段階に入ったことと無関係ではない。五九年一月に発足して以来一年共同市場は予想以上の力量を発揮した。十一月末の外相会議では一月一日から域内諸国間の輸入割当の拡大を域外諸国に対しても容認することを決定し、さらに域内関税撤廃と貿易自由化の完成を当初の予定一〇~一三年を七~八年で遂行するという提案が現実性のある問題として検討された。西独の強力な発展、フランスの「ヨーロッパの病人」の地位からの脱却、イタリアの外貨準備の好転等共同市場六カ国は世界市場にアメリカ圏、イギリス圏、ソ連圏と並んで強力な第三勢力として登場し、アメリカの独占的地位に挑戦しつつある。マーシャルプランを出発点として築かれたアメリカを盟主とする帝国主義者の「実践的友愛」は諸帝国主義者間の激烈な競争と闘争にとって代られようとしている。ワシントン~ボン枢軸は、ボン~パリ枢軸に代られた。そしてボンとパリの間にも共同市場の支配権をめぐつて協力のかげに、微妙な対立をはらんでいるのだ。

帝国主義者を美化するのは誰か?

このような西欧帝国主義者間の不一致の拡大は、プラウダの云うように緊張緩和の世界的潮流の前に「NATOがNATOであるかぎり解決不可能な課題に直面している」ことの証明であり従つて労働者、人民は平和の獲得のためにはこの不一致をできるだけ拡大し、「冷戦にしがみついてる連中を孤立させ」るために闘えばいいのだろうか。例えば、イタリヤでアイクを歓迎し緊張緩和の空気をあおれば、セニやペラの反動性が暴露でき、フランスでアイク歓迎のレセプションに出席し、ドゴールのフルシチヨフ招待とアルジエリア自決案に一定の支持をあたえれば、冷戦にしがみつく連中ヤアルジエリアの統合論者を孤立させることができる等々。否!断じて否!

存在する対立は、よい帝国主義者と反動的帝国主義者の対立などではまったくない。はげしい市場競争戦にいかに勝ちぬいていくか、そのために各国で労働者人民をいかに搾取し抑壓するか、これが帝国主義者たちの共通の実質の課題なのであり現われる不一致はこの政策の違い、帝国主義的対立の表現にすぎない。「新らたな変化」は、帝国主義者たちの新らたな階級支配の方法を示しているだけだ。だとすれば、われわれがこれを支持するなどということはいうもおろかではないか。

われわれが今なすべきことは、彼らが今やろうとしている新らたな階級支配の政策が、なにを意図しているのか、労働者階級に対するどういう攻撃を準備するのかを明らかにしこれと闘うことである。

アイクが笑顔でフルシチヨフと会っている間に、アメリカ帝国主義者たちはアメリカ帝国主義の屋台骨をゆるがした鉄鋼ストを弾壓した。なぜか。ヨーロッパとの競争に勝つためには賃金高によるコスト高を克服することは緊急の課題であり、そのために労働協約の改悪による労働強化は至上命令だったからである。

ドゴールはアルジエリアに「平定後四年内に独立か否かを投票によって決める」という新提案をした。なぜか。フランスが国際競争、国際政治の舞台で大国として振舞うためには、東西会談の前に、アルジエリア問題になんらかの解決をあたえることが不可欠だったからだ。だからその内容は九月十七日の仏共産党政治局声明のいうように「すべては〝平和化〟の名のもとにアルジエリア抵抗運動の軍事的抑壓、降服の問題に従属させ」「事実上のアルジエリアの領土と人民の永久的分割」をもたらすものであり、サワラの石油資源はいかなる場合にもドゴールのふところに止まるようになっているのである。フランス共産党は十一月三、四日の中央委員会で、九月十七日の政治局声明は全面的に誤っていたと自己批判し、ドゴールの、九月の新しいアルジエリア政策に消極的支持を表明した。だが支持は支持!

世界の労仂者階級は、敵がだれかを見失わされようとしている。公認共産党の指導は混乱と誤謬を累積している。帝国主義者どもが外交政策をかえるたびに、労仂者の敵も変る。「昨日の敵は今日の友」!だが、この間に彼らはみずからの政治プランを着々と実現しているのだ。

今こそ、われわれは敵を鮮明にしなければならぬ。今彼らがとるかにみえる「平和政策」の階級的意図をみぬかなければならぬ。帝国主義者に対するいささかの甘い評価も否されねばならない。

欧州十七カ国共産党声明のごとき、一般的平和へのアピールと一部帝国主義者へのへつらいと無内容な統一の強調は、闘いに混乱をもちこむばかりでなく、誤りと改良主義的思想を植えつける以外のものとはなりえない。

それは、帝国主義諸国家間の対立と、闘争の関係が全く新しい段階に進めはじめた一九五九年には、小ブル的な層に一定の力を持つかも知れぬ。しかしそれは、帝国主義間の対立と自国プロレタリアートへのしれつな搾取を必然にする。平和主義をのりこえた、世界革命の思想こそ、明日の世界を予見するものである。

民同社共の裏切りをゆるすな

一・一六岸渡米阻止闘争を組織せよ！

安保改定調印のため、岸は十六日に代表をひきつれて羽田から出発する。彼らは調印を無事すませて、安保改定問題に一応のくぎりをつけ、通常国会の予算審議をすませてから、批准討議に入ろうというのだ。

通常国会での彼らのねらいは資本蓄積のテコである三五年度予算の通過と、安保改定批准の二点にしぼられている。しかも、それを個別に三月までは予算、四月から批准とおし通してゆく方針である。

したがつて労仂者階級が、全体の目標を安保改定の粉砕に設定し、そのために全力量を集中する方向で進まぬかぎり、彼らのペースにまきこまれる可能性はきわめて強い。十一・二七でせつかくつくられた実力闘争の方向が、十二・一〇でふたたびぶざなりのカンパニアにすりかえられてきている現状では、とくに、岸が渡米する一月十六日、全国的に強力な抗議闘争を展開する中で、東京神奈川の労働者を中心にして、羽田への大動員によつて渡米阻止の行動を展開することが全闘争の中心となつてきた。

渡米阻止の大闘争が展開されることは、十一・二七以後の弾圧で若干たじろいだ全階級を再び勇気ずけ、何よりも、岸の調印計画に大打撃をあたえることによつて、その後の全闘争をきわめて有利にみちびく契機となるだろう。

ところが、十一・二七から十二・十〇にかけて労働者階級を無残にうらぎつてきた総評民同と、社共両党は、この羽田動員計画に極度の日和見におち入るばかりか積極的な妨害者となろうとしている。彼らは敵との対決が明確になることが何よりもおそろしいのだ。岸の渡米を阻止し打撃をあたえるということよりも、なんとか戦闘的労働者と学生の行動をおさえることによつて事態をまるくおさめようというのだ。

社会党は中執で羽田動員をきめたが、実際には沿道での見送りデモに止めるハラである。共産党は十六日の意義をあいまいにするために、十四日に集会を開き羽田へは代表派遣でお茶をにごそうとし、総評民同にいたつては二二日の書記長会議で勝手にきめて、すでに動員を組もうとしている東京地評の行動規制にのりだしている。彼らが実際にたたかつた全学連を孤立させ敵の出頭命令に国民会議の決定も無視して応ずるといつた闘争の妨害者にすぎぬことは明かである。

彼らは十二月二五日の国民会議全国代表者会議でも、一月闘争の組織のために闘うのではなく何とか一月の革命的行動をおさえるのにやつきだつた。しかし、革命的労働者は、東京、大阪京都の三地評が明確に羽田動員を決定してのりこんだように、はつきり民同をのりこえてすすもうとしている。会議では彼らはおさえきれぬと見るや、すべてを国民会議幹事会にうつし、そのボス交で羽田をおしつぶそうとしてきた。

彼らの多少の誠意を期待して問題を上部のかけひきで処理しようとしてもだめである。明確にストを基礎に一・十六羽田大動員を闘いぬくために、直ちに全国での下からの強力な準備をすすめ彼らの、裏切り計画を水泡に化させるため、今や一切の努力を傾ける時がきたのだ。

全逓を国鉄の二の舞とする

藤林あっせん体制をぶち破れ

一二・二一の裏切りと全逓労働者の課題

十二月二一日午前六時十五分、全逓労組中執は、団交再開要求の闘争にたいする藤林あつせん案を受諾することを決定した。この朝からの三日間の休暇闘争を、百五十局では、殆んど脱落なしで完全実施しており、すでに一千万通の滞貨郵便物ができ、もし三日間の闘いが打切られなければ必ず年賀郵便の松の内配達が不能になるという闘いの高揚のなかで、中執は、こういう形で団交再開要求の闘いの終止符を打つた。

宝樹副委員長はあつせん案について「解雇委員長は対官庁の代表権はなくなつたが組合の執行責任者として最も大事な指令権、団交権などは存在しており、解雇役員を変える必要もなく、組合の主張が入れられており、勝利といえる」と記者会見で語つている。

あつせん案の文面は「組合執行部はこのさい、とりあえず当局が解雇の措置をとつた委員長、副委員長に代り、当局が解雇の措置をとつてない中執のなかから臨時の組合代表者を選び、これに団交・協約の締結、その他組合代表業務執行の責に任ぜしめること。当局は臨時の組合代表者を相手方として団体交渉、労仂協約締結等に応ずること」というだけだ。

団交再開要求の闘争は、公労法四条三項の適用による全逓の非合法組合としての認定にたいする闘争であり組合の役員選出権にたいする不当干渉反対闘争でありその点での味方の前進、敵の後退がなければ、闘争は勝利とはいえない。

しかし、このあつせん案の中では当面の組合業務の代表者を解雇三役と別にえらぶ、ということ以外には、なにも書かれていない。またあつせん案中の「組合代表者」の権限が、宝樹副委員長の言葉のように形式的なものとしてだけ考えられるかどうかも全然明らかでなく、文面からはむしろ、解雇三役の権限を停止して代表を選ぶとしか考えられない。

だから、団交再開要求の闘争は、「勝つた」などとは絶対にいえないし、あの、年賀を全国主要局で完全にとばすかまえができていたという大衆の高揚のなかでこのあつせん案の受諾は、「問題をすべてあとに残した闘争の打切」という性格のものでしかなく「闘争打切りのためのかつこうをつくつた」としか、闘つた組合員には感じられないものであり、闘う力に水をぶつかけ、闘つた組合員の怒りと失望をひきおこすものだつた。

団交を再開させたのはたしかに闘いの力だつたが、それは真の団交再開ではないごまかしの妥協案だつたのだ。

今度の全逓の年末闘争は、年末手当二カ月、二五〇〇円ベ・アの完全実施という経済要求と団交再開要求とをもちながら、全体として、まつたくの経済闘争としてではなく、権利闘争の意識をもつて闘われた。

全逓労仂者の生活にとつて年末年始の繁忙手当が相当大きな位置を占めているなかで、「年賀をとばす闘い」が、ただの経済要求とは考えられ難いし、実際に、二〇日間の時間外労仂拒否（三六拒否）の闘いで、最低三千円位の時間外労働の手当を損をしているので、経済要求で闘つている局はほとんど脱落してしまつたという状態があつた。（十九日の省の発表でさえ、脱落は四五%にとどまつていた）その意味で、全逓労働者の「金も問題だが、とにかく闘わなくてどうなる！」という階級的意識が、この時ほど高揚したことはなかつたし、高揚をだれも予想したものはいなかつた。

警職法闘争とは全く切り離された型で、そのあとにはじめられた昨年の年末の団交再開要求の闘いは、十二月中旬の時点で、三六拒否闘争が脱落が多く闘い抜けない、組織が弱い、という判断から、中闘は闘争を打切つた。

それから一方ではILO批准問題が、西欧資本家の手による日本資本家階級への攻撃として打ち出されてくるなかで、名高い「全逓権利闘争のタコツボ戦術」が全逓民同幹部の間でいわれはじめた。

「ILO批准まで全逓はタコツボにこもつて青空をながめて組織の強化をはかるのだ」というわけだ。

八月の福岡大会の基本方針にも、九月の全国戦術委員会の具体的方針にも、その考え方が、多くの批判をあびながらつらぬかれていたのだ。「今ザの年末闘争はやる」「しかし、来年三月にILO批准は確実でありヤマを設けて決戦を挑むというような団交再開闘争はできない」これが大体民同中闘の年末闘争の考え方だつた。

およそ労働者の闘いを、当局と組合とのワクの中でしか考えられず、資本家階級の打倒を、それをめざす労仂者階級の闘いを考えられない彼らは、労働者の一つ一つの闘が、どう労働者を変えるのか、闘いを見、闘いた労働者にどんな影響をあたえるのか全くわからず漠然とした労仂者一般、無力化され、小ブルの影響下にある、彼ら自身の自画像としての労仂者しか頭に浮ばないのだ。

この中闘の考え方に、全逓労仂者は事実の上で打撃を加えた。

十一月の中執のまいに大出書記長が「年末に一千万通の滞留物と、三百局の三六拒否ができる力があれば年賀をとばす」といつていたという話が流布されている。話は話としても十二月中旬の段階で事実一千万通の滞留ができ、六百局に近い局が三六拒否で闘つていた、という力は、全く民同中闘に予想できなかつた事態だつたろう。

この闘いの力をつくり出したものは、全逓の活動家の徹底的な闘いであつたろうが、それをあたえ、つくり出したものは、一つは十一・二七の大闘争を中心とする安保改定にたいする全労仂者の闘いであり、そしてさらに、とくに前からの東京の中野、牛込の非常勤闘争であつたにちがいないだろう。

全逓民同のタコツボ闘争の展望を根本からひつくりかえしたのは、全く東京の非常勤闘争であつた。

八月から十一月まで、全国大会と戦術委員会が設定した「組織整備」の期間が、この闘いのなかで、郵便物の絶えざる混乱と、物情騒然たる情勢にかわつてしまつた。

活動家の間で、非常勤闘争をどう闘うかが、徹底的に討議されはじめ、職場闘争の統一闘争への発展が、考えられはじめた。

そうして、実に、年末闘争が、団交再開に、年末手当要求、非常勤制徹廃、が結びつけられて闘う条件がつくられたのだ。

ところが十一月甲府中委で民同は、非常勤闘争を統一要求をかかげれ統一闘争にすることを拒否した。

中野、牛込の闘いのなかでとくに牛込が、四ケ月にわたる闘いの末遂に非常勤先任権を事実上確立するという勝利をかちとつたのに、それは全く年末の統一闘争とは切り離されてしまつたのだ。

年末闘争はこういう全逓内の改良主義と階級的立場との闘いのからみあいの中で準備された。

それは、民同によつて無視され、あるいは全く過少評価されてしまつた次のような階級的意義をもつていたのだ。

才一に、団交再開要求という権利闘争——政治闘争として、政府の全逓の非合法組合化にたいして、真向から闘うという、現在の点における安保闘争、教育課程闘争とともに対政府の労仂者階級の闘いの中心となるものだつた。

団交再開要求をこういう観点からとらえ、安保闘争と結びつけ、岸打倒の大闘争をつくりだすという観点を民同は全く無視し、回避した。全逓のなかで安保は、全く下部活動家の手に委ねられていた。そして、安保の統一闘争と、全逓の闘いは全く切り離され、才八次は全く安保闘争に、才九次は今度は経斉闘争へ、という形で、闘いのエネルギーが対政府の闘いに爆発するかわりに、観念的に分散させられてしまつた。団交再開要求にくらべて、安保改定阻止の闘いは、全逓労仂者の要求とするための努力が、僅かしか行なわれなかつた。

才二に、全逓の年末闘争は非常勤闘争をとりあげて、炭労三池の闘いとともに、さらに全造船の臨時工首切反対闘争とともに、合理化反対闘争の突破口をきりひらくというものになるものだつた。

ところが非常勤闘争は、年末闘争の要求の一番最後に「非常勤制徹廃」という一項があつただけで、具体的な職場要求を統一要求として高めるような努力は何も行なわれず、炭労闘争との結合はスローガンにはあげられても具体的には全く問題ともされなかつた。

十一月から十二月にかけて三池の闘いは指名解雇という段階へ突入し、しかも総評の裏切的な労使休戦による話し合の要求、中山あつせん案による会社との団交方針などのなかで、三池の労仂者が、全階級的統一闘争の展望を全くもてなくなつていたとき、全逓の闘争が、三池と最大限に結びつくことはこの上なく重要なことだつた。

全逓の闘う労仂者も、炭労の労仂者も、昨年の全逓の歴史的な三・二〇の闘争のさいに、ストライキの古河好間の炭労労仂者が東京中郵のピケで警官と闘つたことを忘れることのできない記憶としてもつている。

三・二〇の闘争処分から出発した団交再開闘争が、なぜ今もう一度炭労の闘いと結びつくことができないのか？

三・二〇には炭労が全逓を支援した。

今度はまさに全逓が炭労を支援するときだつたのだ！

全逓民同の頭には、こうした戦術はまつたく浮ばなかつた。炭労がどうなろうと非常勤闘争をすら一支部のワク内にとじこめることしか彼らは考えないのだ。

こうした、闘争の階級的意義についてまつたく無視した上で彼らは団交再開を、形式的に実現させた。

その過程についても、すでに新聞等で報ぜられているように、はじめから中闘が田中郵相や倉石に「妥協の条件」について話しあいを求めたのであり、団交再開徹底的闘争と、その中での労仂者の階級意識の高揚、闘いの爆発をめざすのではなく、中闘自身が、「交渉委を解雇三役と別の中執で構成して団交を再開する」という、政府の全逓非合法組合化にたいして対決しない妥協案を提示し、それが押しまぐられて落着く先があつせん案だつた。

全逓労仂者には勝利がかちとられてはいない。民同の裏切のなかで、闘わねばならない闘いの課題が出されたのだ。

すなわち、政府の全逓非合法組合化と、組合役員選出への不当干渉という組合の基本的権利にたいする攻撃が、いぜん打撃を受けないで続いていることをつかみ真の団交再開を要求すること、その点であつせん案の内容と政府の態度を明確にして闘うこと、そして、この闘いにおける民同中闘の裏切りを明確にバクロし、彼らが闘争を放棄したことにたいして徹底的に責任を追求し、真に闘う体制をつくりあげること、が必要である。

同時に解決されていない経済要求、職場要求をかちとるために、徹底的に闘うこと。

そして一・一六岸渡米阻止羽田大デモに、全逓の全力を結集して闘い、ここで安保改定調印の企図を粉砕し全逓非合法化を押しすすめる岸を打倒するための闘いをただちに始めることだ!!

闘いはわれわれの手によつて新しくはじめられねばならない。彼らの裏切を明確にバクロし、活動家を当面の闘いど一月闘争に結集させよ！

三池の兄弟を見殺しにするな

炭労防衛を全階級の力で闘え

「三池のたたかいを中心に三鉱連の統一闘争をつづけつつ最終的には炭労全体のストをもつて三井資本に対決する」中山あつせん案拒否をきめた後の「三鉱連の戦術決定の理由」（炭労新聞号外十一・二六）は右のようにいつている。この方針は正しいし三池の闘いの勝利の道は全くこの炭労の統一闘争の方向にしかない。

しかし、現実には、期末手当要求、安保闘争が闘われながらも、それが、三池の首反を独自の課題としてかかげて統一闘争を組む方向はとられなかつた。

統一闘争は「最終的には」という口先でいうだけではつくりだせない。

それは統一闘争をくずそうとする敵や内部の社民思想との非妥協的な闘争通じてのみつくられる。

十月末からの団交のなかで組合が指名解雇の条件として「生産体制協力、自由意志によつて希退は認める」という線まで出したこと、（炭労新聞十一・六）は明らかに三井資本の攻勢にたいする全く誤つたあまい幻想から出発しており、この思想が、中山あつせん案にたいしてはじめから拒否の態度をとつていた資本家にまた幻想をもち団交を要求してけられるという結果を生んだのだ。

今日三池は、単独で火・金の二四時間ストをくりかえしている。総評はこの闘いを「長期にわたつて挑発にのらずに闘いぬく」といつている。しかし、こうしたあまい幻想と、資本との決定的対決を回避しようとする社民的思想の自己批判なしでのこうした言明は、「長期にわたつて三池だけを闘わす」ということ以外の何ものでもない。

期末手当闘争は古河の一社重点ストで終つてしまつた三池の闘いを統一闘争にするためには、これまでの闘いの徹底的な総括と自己批判が必要であり、それが緊急に必要なのだ。

闘いの経験から

力こそ勝利の保証

首都の教育課程講習会 阻止闘争の経過と展望

十一月末から十二月はじめにかけて、マスコミからは黙殺されていたが、首都の教育労働者による重要な闘争があつた。新教育課程全員講習会阻止闘争である。最終的には教科書の国定化という方向で成し遂げられるものではあつても、全教員を三年計画で洗脳しようというあたらしい教育課程の具体化は、孤立した勤評闘争の中で崩壊しかかつた日教組を、たとえ形式的であれ、自己の掌中に掴むという敵の階級的攻撃であつた。折も折、「教育課程闘争は思想闘争である」といつた類の一面的強調が共産党を初め、指導部からまきちらされ、行政措置によるシャニムニの権力からの攻撃にたいして、明確に大衆闘争をもつて闘うという方針の確立が決定的に立ち遅れていた。都教組も、日教組も、「拒否」「不参加」は口にしても、実力をもつて阻止する方針は打ち出さなかつた。

「不参加体勢」という一見極めて組織的かつ立派な方針も、勤評体制下の現実の中で破産していつた。十一月初旬の都のプログラム伝達者講習会では、組合幹部が未練がましく参加している姿がテレビに報じられた。十一日、西部ブロックでのピケ体制は戦術委員会決定の名前で圧殺された。教育課程闘争は危機にひんしていつた。

十一月十日都教組十二中委は不充分ながらも足立、荒川の共同修正案による「不参加体制の確立」と「説得班の編成」という従来よりは闘う方針を決めた。しかし、どういう説得をするのか、という最も重要な点については九月闘争以来はつきり現れていた統一指導の完全欠如による支部まかせになつていた。

だが闘う教育労働者の突き上げは、「批判的参加」を執拗に口にしていた北多摩の支部幹部（その中には共産党員もいた！）をして、一時的に闘いを組ませ、十八日八王子、十九日北多摩と、講習会を阻止させた。

しかし、それもつかの間、この成果を基礎にさらに勝利を確実化していく方針が明確化されなかつたために二五日には太田、板橋等四区で、ズルズルと開催を許してしまつた。しかも、十二月二日には、都教組最強と目される墨田支部が、二百名におよぶ、ピケ動員をあたら無為に放置して、講習会開催を許してしまつたという、裏切りは戦術転換（墨田では早くから、分会討論がくり返され、ピケによる実力阻止は、下部において固まつていたのだ！）により、首都の教育課程闘争の展望は極めて暗いものになつていつた。

この沈滞と混迷を打ち破つて、教育課程闘争の真の戦術の効果を、現実に示して展望を切り開いたのは三日の豊島支部の闘争だつた。かれらはアリ一匹通さぬピケを、支援労組、全学連の共闘の下にくみ、講習会を完全にぶつつぶした。「他支部がやらなくても俺の所は断固ピケでぶつつぶす」という闘いの主体性につらぬかれた、豊島の先進的活動家の努力によつて、初めてこれは可能になつたのだ。しかもこの闘いの中でかれらは次のことを暴露し得た。

一、断固たるピケ体制の前に指導室長は「これで君達のメンツも立つたろうから二十分でも三十分でもいいから開かせてくれ」といつた。（そして事実、五時頃になつてから会場を変更し四人そこそこで、こつそり開こうとしたのだ——もちろん瞬時にたたきつぶされたが——！」つまり、かれらにとつて、講習会の内容はどうでもいいこと、要するに開催して、参加させればいいということ、その行政的な意図の露骨さを！

二、「希望参加による研究協議会」と銘打つても、タクシーにより分会ごとに校長の監視づきの出席、指導室長の「いくら遅くなつてもやるんだ」という言葉！ 要するに受講者は希望参加による主体的研究者ではなく、権力行政の道具に過ぎないんだということを！

三、気の弱い受講者の「強力なピケさえ組んでくれれば、参加しない口実ができる」という言葉。それ自体は消極的なものであつても権力の圧迫という現実を無視して、一人一人に不参加を強制するよりも、ピケ闘争の方が、はるかに容易だし、又一、二、のように敵の意図が内容になく、名目にある以上、ピケによる実力阻止だけが、唯一の闘いの方針になりうることを！

豊島の偉大な成果は、同じく「俺の所だつてたたきつぶしてやるぞ！」という姿勢を徹底的な大衆討論のなかで固めていつた荒川支部の兄弟が見事に引きついだ。そのアリの子一匹通さぬ完全なピケ体制を前にして、八日区教委は開催を中止し、九日、会場を偽つてまでしてこつそり開きかかつた分科会は、組合員の憤激の十割動員で瞬時にしてふみつぶされた。そして、この闘いは葛飾に、品川に、文京に広まり、ピケによる完全阻止、内至、それが不可能な場合でも、部分的にでも実力によるたたきつぶし、という方針が闘う幹部の中で急速に常識化されてきている。

この闘争を充分討論して新年からの方針を打ち出すべき中央委員会が流会になつた事などに見られるように困難の度は減じてはいないが、豊島にしろ荒川にしろ、旧来の都教組内左翼指導部の日和見的カラを大きく脱皮して、新らしい革命的指導部への結集をはかる中で新春の闘争を更に全都へ、全国へ、広め深めていくために、日夜献身的努力がなされている。

一月にも、延期された講習会阻止の闘争は闘われねばならぬし、二月には中学でも始まる。しかも来年も再来年も……。

教育課程闘争は、いま始つたばかりだ。実践的にその正しさを証明された「実力阻止」の方針を更に固めて先進的教育労働者は大きく前進するだろう。

残念ながら、都教組執行部はこの闘争を指導するかまえを全く見せていない。

それは、十八日に招集されて、又も流会とされてしまつた都教組中央委員会を見ても明かである。

敵は、これに対して、荒川文京区教組の幹部を逮捕し弾圧する方針でのぞんできている。

東京の闘いを全体に拡げ論議でなく行動で闘争で、組織してゆくことが、今なによりも必要である。

日共の新たな内部闘争について

日共港地区委の革命的方向を守れ

十二月十三日、日共港地区委員会は「プロレタリア革命の勝利のために、公然たる党内闘争を展開せよ」という声明を全国に向つて発表した。

日共中央委の、日和見主義と民族主義にたいする闘争はすでに九月末の才四回港地区党会議において公然と爆発し、その後これにたいしてむきだしに加えられてきた官僚との間に激しい党内闘争が展開されていたがそれは遂に十二月に至つて公然たる分裂にまで発展したのである。

一九五八年についで一九五九年のアカハタは再びトロツキスト狩りによつて埋められ、「港地区」は新たにトロツキストの胎頭としてその集中砲火をあびている。

才四回港地区党会議で、警職法から春闘、参院選、合理化反対闘争、安保闘争とこの一年間における党の政治方針と戦術の総点検のなかから、この一年の党活動を日和見主義的誤謬の再生産の歴史として自己批判し一切の根源には基本路線に於ける民族主義的偏向にあると確認したこと、そしてその上にたつて戦略と戦術に関する全党討議の総括を要約したことは正しかつたしそれ自身、共産党下部組織に残る革命的精神の表現であり、もしいまだに党の革命的再生への一筋ののぞみが託されうるとするならばいわばそれは「再生への才二ののろし」であつた。

しかし、ひきつづき開かれた才五回都党会議は、こうした港の報告と訴えにたいして激しい野次と敵意をもつて報いただけであり、「ゼネストによる岸打倒」の方針が安保闘争にたいしてなされたとき、万場は嘲笑によつてこれをはねつけるありさまであつた。

そしてその後を追つて加えられた港への「党」の回答は徹頭徹尾組織的脅迫というわけだつたのである。

山崎地区委員長ほか三名の排除にはじまつてレッテルは「自由主義、トロツキスト、分散主義」から「トロツキスト、反党分子」にとつてかわつた。

中央に屈服するか、それとも自己の階級的立場を断固として守りぬくか、——二者択一の岐路に追いこまれて、港地区委員会はきつぱりとあの道を選んだ。

いつさいの脅迫と弾圧に憶することなく、労仂者階級の利益のみを唯一の基準として、日和見主義との非妥協的な闘争に立ち上つた港地区共産党員の態度にたいして心ある労仂者はすぐれて革命的な共産主義者のほこるべき不屈の精神を見出すであろう。

日共が「十二月一日山崎は、「『既成政党はたよりにならない。国会請願運動の責任を全学連になすりつけている。もう一度国会へ押しかけろ』という趣旨の演説をおこない、党の方針に反対し、トロツキスト集団の挑発的方針を宣伝した。」と非難し、「救い難い反党分子、党破壊者」「党と労仂者階級の敵として党から追放」する（アカハタ十二・十七）というとき、革命的労仂者にとつて、いずれを自己の前衛とみ、いずれを敵と断罪するかは明白である。われわれは、日共を労仂者階級の党と呼ぶことを事実に照らして拒否するとともに、港の闘いに強い支持と激励を惜まないであろう。完全な小ブル政党に転化した日本共産党に、その再生を期待することは犯罪にひとしい。

われわれは、港地区の革命的共産主義者諸君の闘争を無条件に支持するとともに日本共産党再建のためにではなく、新しい真の前衛を結集するために、わが同盟の戦列に加わつて、共に闘いぬくことを訴えるものである。

アー・ペー運動

記録映画「安保条約」の実験性

北島 美恵子

わたしたちのこの激動の時代には、歴史のなか深く書きこまれるべきことがらが無限に豊富にたちあらわれ、ひしめきあつて、はげしい勢いで後方に駆けすぎていつている。

プロレタリア革命を遂行する雄々しい群のなかからすぐれた記録者や作家が無数に生れなくてはならない。ダイナミックな、底力のあるこの激動を大胆に記録し、表現して、この現実に突きたてて前進することが——すでにして要求されている。

現在の日本の文化情勢は、深化するタイハイ文化を鋭くうちやぶろうとする少数の「アヴアンギャルド」作家の提示する作品そのものが内包する芸術的危機に、ひとつの特徴をみることができる。

主体的なあたらしい方法が論議され、作品化されて、何故に、この危機が集約化されてその作品にあらわれるのか？

その、ひとつ。記録映画「安保条約」（演出・松本俊夫）は、総評の教宣活動として、これまでなされた「悪法」「日本の政治」の方法を否定して試みた意欲的な実験性に富んだ作品である。それは、パノラマ式に観客大衆に外側から語りかけるのではなく、観客大衆の内側から語りかけ、かれらのモノの見方を変革しようとする意図があてよれる。

この意図は、今後展開されるべき、アー・ペー運動に貴重な示唆を、あたえている。

しかしながら「安保条約」の実験性は挫折しているといえる。作家の意図は貫徹されず、作家の狙つた実験は作家みずからの現実認識によつて革命性を獲得するにいたらず、イマージユの主体的な内的統一性も獲得できずに、弱体化され、実験性が分散してあらわれている。芸術のアクチユアリテを主体的に追求しながら、かれは政治のアクチユアリテを主体的に追求しなかつたからこそ、かれの図式、かれの構成にしたがつて整理するならば、戦争につらなるイマージユに比して平和につらなるイマージユが力弱く、しかも両方のイマージユがとくに日本の現在形では混乱してしまつて、破綻しているのだ。「安保条約」の作者の意図を作品化するのであればなおのこと、政治のアクチユアリテをつかみだすとき、安易に「二つの宣言」や、日本共産党の意欲のない「分析」にのつかつた図式の上に構成をたてるべきではなく、もつとドキユメンタルにこの激動の現実に対立すべきであつた。そうすれば、平板的な「天国」ソ連圏に対する「悪魔」アメリカ式の図式ではない、まさしく安保条約のもつインタナショナルな階級闘争の本質が日本プロレタリアートを中心的イマージユとしてフイルムに定着できたのではないか。多くの論者が、最後のシークエンスに問題点を集中して語つているがわたしは無関心な人々の目を本当に内側からひらかせるためには、この二十分のフイルムの全体を貫く現実認識にこそ問題があるのであつて観客大衆の胸壁を内側からぶち抜いて、安保条約の階級的本質に目をむけさせるためには、作者みずからが観客とともにおかれたこの現実、——二つの階級、迫りくる唯一の決定的な革命闘争の、いずれかの側に主体的にみずからを位置づける闘争をおこなわなければならぬし、プロレタリアートの側にみずからを規定してこそすべての作家の意欲ある実験性が革命性に転化する契機をえられるのではないか、と考えるものなのだ。

共産主義

第六号 1960・1 定価 卅円 十五日発行

わが同盟のこの一年の活動と当面の任務 われわれの「なにをなすべきか」 森 茂

「財閥と国家」—日本国家独占資本主義— 姫岡 玲治

人民民主々義と平和擁護運動 —戦後の日和見主義— 佐久間 元

国際共産主義運動入門講座3 西イリアン解放闘争とインドネシア共産党（下） 岡田 行男

リベラシオン社 振替 東京 三七〇九九番 東京 練馬区豊玉北 五・八